
魔剣士少女リリカルなのは

食器野さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔剣士少女リリカルなのは

【Zコード】

Z2321V

【作者名】

食器野さら

【あらすじ】

恐怖の土台が再来し、緊迫する海鳴在住魔導師達。希望は一千年前すでに生まれていた。魔剣士の子孫、未だ健在。一度削除したものの大修・変更して再投稿したものです。

プロローグ（前書き）

祝ツー！復活ツー！

プロローグ

一 千 年 前。

人と悪魔の争いがあつていたころ。

一人の悪魔が正義に目覚め、劣勢だった人間を勝利に導いた。時の流れの中で、彼の勇姿は忘れ去られていったが、その子孫は未だ健在である。

誇り高き魂は、脈々と受け継がれていた。

夜。

いくつものビルがそびえたつていて、

その中の一つに、二人の人物が立っていた。

一方は中年男性で、もう一方は少女だ。

男性が口を開く。

「確かに、この地は力に溢れている……『あれ』を立てるには適しているが……いいのか？」

「別に構わないわ、ただ騒がれるのも面倒だから、海上に立てることになるけどね」

男性はつかの間黙つたあと、

「……『彼女』は、くるのか？」

「知れたことを……当たり前じゃない」

少女は嘲笑を込めて、言い切った。

「ふうむ・・・・・まあ、そう信じるとするか」

男性の、色が違う両目がギリギリと光る。
続けてくつくつと笑った。

「しかし、悲願が叶うわけだな、わたしは支配者となり、お前は祖父を超える悪魔となる・・・・・・」

「やうね」

笑い続ける男性を素つ氣無く突き離す。
だが男性は気にした様子を見せなかつた。
少女は夜の帳を見下ろして、静かに咳く。

「止められるもんなら止めてみなさい、姉さん」

「・・・・・？」

同じ頃、亞麻色の長い髪を持つた少女が、夜空を見上げた。

束の間見つめるものの、苦笑いしながらため息をつく。

「あやか、ね」

そして少女が歩き出す。

周囲の壁は真っ赤に染まつており、そこら中に不気味に光る宝石が散らばっている。

一步踏み出すたびに宝石は吸い寄せられ体に入り込むが、彼女は特に気にしていないようだった。

鼻歌を歌っていた少女は、ふと思いついたようにまた夜空を見上げる。

「今頃どうしてるかなー？あの子」

つぶやくと同時に、また息があつた異形を斬り捨て、撃ち抜いた。

我、英雄を受け継ぐ者。

契約は要らぬ、ただ護るために剣を振るわん。

力は我に、思いは刃に、

そして、

誇り高き魂はこの胸に。

魔剣士少女リリカルなのは

始まります。

プロローグ（後書き）

短いのはプロローグの宿命だと思つ（ドヤアツ！！）
というわけで、DMC（クラウザー様じやないほうね）復活です。
主に3のストーリーを基にして進めていこうと思います。

第一話塔（前書き）

初めて予約投稿なるものを使ってみたり。

第一話塔

「どうして、何でこんなことに……？」
さつきまで『二人』のなのはちゃんが戦つていて、わたし達の友達の方のなのはちゃんが危なくなつて。
それで気がついたら……

「な……な……なのはあ……」
「いやあっ！……なのはちゃん……」

なのはちゃんの心臓に、刀が突き立てられていた。

「」との始まりは、一日前に遡る。

「海上に魔力反応？」

「塔つて、何なん？」

突然ハラオウン宅に集められたなのは達。

一通りの説明を聞いた後、フェイトとはやての第一声がそれだつた。召集した張本人であるクロノは、黙つて肯定してから、

「つい先日のことだ、塔には認識阻害もかけてあるらしく、幸い一般人には感づかれていない」

説明しながらパネルを操作して、画像を呼び出す。

表示された画像には、上空から撮つたらしい塔が写つっていた。

「?.全体がよう見えんけど、横から撮つたのは無いん？」

「無い、一応先日撮りにいかせたんだが・・・・・・・・」

クロノは語るのを渋つているらしく、少し黙り込んでから、

「撮影に向かつた5名全員、死亡した」

「・・・・・・!？」

驚愕のあまり、身を乗り出したのはヴィータ。

はやてがそれを制したのを見届けてから、クロノは続ける。

「その局員達が、最後に送つてきた音声があるが・・・・・・・・聞
くか？」

全員が顔を見合させてから、頷いた。

クロノも返事代わりに頷いて、再びパネルを操作。ファイルを開き、再生する。

『一、こちらアルファ1！現在未確認生命体に襲撃を受けている！奴ら、頑丈すぎて、魔法じやびくともしない！』

通信状態が悪いのか、雜音が所々に混じっているが、状況はかなり緊迫しているようだ。

『スパークはどこだあ！？』

『つうぐああ！！』

「・・・・・・・！」

突然割り込んできた人外の声。

ここに来て、今まで黙り込んでいたなのはが初めて反応を示した。

『みつ、未確認の画像を送る！今後の捜査に少しでも役立てつ・・・・・』

ブツリッと、音を立てて通信が途絶えた。

重い空氣になる中、クロノはまたパネルを動かして、塔とは別の画像を表示した。

「・・・・・これが、先ほどの通信の直後に送られてきた画像だ」

酷くぶれていてはっきりとは見えないが、全体的に黒く、紅い鎌のような物を持つているのが分かる。

その奥の方、よくよく見ると、同じ種類と思われる未確認に、頭と胴体を裂かれている局員の姿があった。

幾人かは口を抑えて、無意識に目をそらす。

クロノもこれ以上表示する意味はないと思ったのか、すぐに画像を閉じた。

「…………以上が、先日起つたことだ」

まだ暗い全体を見渡してから、一呼吸置いて、

「これより、アースラの任務はあの塔の調査と未確認の討伐になる、全員、心してかかるよに」

その日は、そこでお開きになり、全員が暗い面持ちで立ち上がり、帰宅を始めた時。

黙つていたなのはが、ぼそつと呟く。

「…………テ…………グル

「え？」

すぐ近くにいたフェイトが反応。

はやて含む他のメンバーも、単語が聞き取れなかつたものの、何かを呟いたというのは理解した。

視線に気づいていないらしいなのは、若干つづむいて考え込む。ぼそぼそと呟き続けて、何かを理解したような表情になつた。途端に顔を上げて、

「…………そつか、来てるんだ」

どこか嬉しそうに、微笑んだ。

「じゃあ何？なのはが何か知つてゐるっぽいの？」

「わのなんよ、ナビ、何も教えてくれんしなあ…………」

やつじほしながら、はやてが見つめた先。

自席で、本を呼んでいるなのはが居た。

題名は『魔剣士伝説』、彼女がよく読んでいる本である。

かなり集中しているらしく、こちらの視線には気がついていない。

「結局昨日もはぐりかされちゃつたしね」

「せやね、つて言つた、なのはちやんつて、あんなに受け答え上手かつたつけ？」

思い出すのよ、昨日のやつ取りの一部。

あの塔は何や！？

まあ～案外『スカイツリー』つて名前だつたりするかもね？

こつちはまじめに聞いてるんだけど？

わたしは不真面目に答えてるよ～

「それになのはちやんの雰囲気、あの間だけがひとつ変わつてたよ
うな・・・・・・」

「ふうん？」

・・・・・・ 本来、仕事の内容を一般人に話してはいけないのだが、はやてやフェイト達は、よく相談している。

捜査で悩み事が出来たなのは達を、すずかやアリサが相談に乗つて、ガス抜きをする。

そんな感じでなのは達の精神的な支えになつてゐるので、クロノもこのことに関しては目を瞑つていた。

「ま、大丈夫でしょ、本当に何か知つてたとしても、わたし達を気遣つてのことかもしないし」

「うん、なのはちゃん、昔からそういうことは不器用だから・・・

「それはそつと・・・」

と、話がひと段落したところで、アリサが切り出す。

「あの子、どんだけ魔剣士好きなのよ?」

「もう結構長い間読んでるよね」

そう言つて、視線がなのはが呼んでいる本に移る。

已然なのはは視線に気がついていないらしく、ただ黙々と文章に目を通していた。

「というか、そもそも『魔剣士』って何?」

「一千年前に悪魔達が侵攻してきた時に、魔界を裏切つて人間に味方した悪魔のお話だよ」

フュイトの疑問にすばやく答えるすすか。

本に関しては彼女に聞いた方が手っ取り早く、分かりやすく解説してくれるので、本を探したりするときには必ず頼る。

「それに確か『魔剣士』は称号で、本当の名前は・・・・・・・・

後に」、はやてはいつ語る。

「『スパーダ』」

『一千年前から、全てが始まっていた』と。

その日の放課後。

アリサとすずかは一緒に下校しながら、改めてなのはについて話していた。

「にしても、今思えば、あの子について結構知らない」とつて多いわよね？」

「うん、もう八年になるから、あんまり気にしてなかつたけど・・・・

「・・・・

当時のことを思い出しながら、一人は会話を続ける。

「なのははつて、わたしらが小一の時に転校してきたでしょ？そもそもなんで転校してきたの？」

「結局教えてもらつてないもんね」

「そうそう、まあ、当時のわたしとしちゃ、結構生意気つて言うか、どこか陰気つていうか」

苦笑いしながら言うアリサ。

すずかはくすくす笑いながら、

「でも、行動力はあつたよね、覚えてる？わたし達が友達になつた切欠」

「覚えてるも何も、忘れられないっての！それまで引っ込んでるつていうか、誰とも関わらなさそうな子がいきなり引っ叩いてきたんだもん」

「痛い？でもね、大切なものを取られた人はもつと痛いよ！！」

当時のなのはを思い出しながら、「そういうえば」、とアリサが気づいた。

「今さら気がついたんだけど、あの頃のなのはつて、土郎さん達に対して若干他人行儀なところがなかつた？」

「うん、結構敬語とか使つてたよね」

当時のすずかはともかく、アリサとなのはは親を呼んでの大騒ぎになるはずだったが、二人の父親達は、自身の娘だけを叱ることにしていたため、そこまで大きくならなかつた。

その時叱られていたアリサが、何となくなのはの方を見ると、他人

行儀な敬語で士郎に謝っていたのが見えた。
それが妙に頭に残っている。

「それにさ…………実は、すずかには話してなかつたんだけ
ど…………」

「うん?」

少し語るのをためらつてから、アリサは口を開いた。

「もしかしたら、なのはに兄弟がいるかも知れない」

「…………うん?」

唐突に告げられたこと、すずかは先ほどと同じ反応を返した。
びっくりことだ、という視線を受けながら、アリサは続ける。

「いや、ほり、四年くらい前かな? その…………なのはが大
怪我したの」

「あ…………うん」

「その時にさ、なのはの部屋を掃除に行つたじゃない?」
「行つた行つた! せめて帰つてくる場所だけでもつて」

アリサは頷いて、

「その時にさ、机の上の、わたしらが来るときにはいつも倒されて
る写真たて、あるじゃない? あれの下も掃除しようつて、触つたと
きに、その…………」

「…………もしかして、見たのー?」

「う、うん」

すずかはよつぽど驚いたらしい。

珍しく大声を上げた。

「…………そこにさ、白髪の男の人と桃子さんらしき人、な
のはと、それにそつくりな子が写っていたの」
「え、それじゃあ…………でもだったら、今はどこにいるの？」
「さあ？…………でも、もしかしたら転校の原因って、その
男の人となのはそつくりの子かもしれない」

真剣な面持ちで、アリサがそう仮説したとき。

「あなたたち、アリサ・バーニングスと用村すずかであつてる？」

突然、後ろから声をかけられた。

『それじゃあ、改めて任務の説明をするよー。』

エイミィの通信を聞きながら、一同目の前の塔を見つめていた。
あまり近づきすぎると、先日のような未確認に襲撃される可能性が
あるため、かなり離れた場所で待機している。

『今回はあの塔に潜入して、民間人一人の救出すること！それと、
未確認に襲われた場合、非殺傷設定を解除していいから！』

シグナムはカートリッジを補充し、ヴィータはグラーフアイゼンを肩に担いで、シャマルはクラールヴィントをいつでも発動できる状態にし、はやはリインフォースとユニゾン、フェイトはバルディッシュを構えて、なのはは黙つて塔を見つめていた。

『恐らく塔に近づけば近づくほど、未確認との接触率が高くなる！各皿心してがかれ！』

「了解！」

返事をして通信をきると同時に、全員が飛び出した。

閑話休題。

塔に近づくにつれ、空気が突き刺さるような感覚がする。

恐らく、先日の通信や画像にあった未確認のものと思われるそれを全身に受けながら、一同はなおも飛行する。

すると前方、塔の手前の方から何かが大量に湧き出でてきた。

全員その場に停止し、個々の武器を構える。

「……………」

誰かがそう呟くと同時に、そいつらは現れた。

真っ黒な衣のようなものを纏い、顔と手は赤く、空のような夜のようないは、確実にこちらを捉えていた。

ふと、その内の一体が顔を上に上げて、何かにおいを嗅ぐような仕草を見せる。

そしてはつとなつたようट顔を戻し仲間に合図。図狂つたよつて叫びだす。

『スパー・ダ！』

『スパー・ダ！』

『スパー・ダ！』

『だがダンテはいないぞ！？』

『しかしこのニオイはスパー・ダ！』

しきりに『スパー・ダ』の名前を呟き、拳銃の裏面には隊列を乱す。が、次の瞬間、動きが止まった。

未確認達の視線が、一点に集中する。

一番前にいた一体が、それを指差して叫んだ。

『スパー・ダ！』

『そこにいたか！裏切り者！…』

その言葉を合図にして、一斉に攻撃に飛び掛る。

「・・・・・・・」

一方のなのは達は隊列を崩さずにいたため、すぐに障壁を展開。鋭い指での突きを防御する。

続けてヴィータの一撃とシグナムの一閃が未確認に浴びせられるが、攻撃は黒い体をすり抜けた。

『気をつけて！その黒い部分はガス！頭が本体だよ！…』

「つはあ！？」

「面倒な敵だな」

上に飛び上がりつて攻撃を避けて、エイミィからの通信に目を見開いた。

「いくで！ リイン！ フェイトちゃん！」

『はいです！』

「わかつた！」

フェイトとはやは魔方陣を展開。

素早く詠唱して、氷の槍と雷の槍を出現させる。

二人一緒に、杖を振り下ろすと同時に号令を下し、容赦なく未確認に攻撃を加えた。

水蒸気と煙に隠れ、視界が悪くなってしまう。だが威力は相当のもの、何らかのダメージは

「・・・・・・・」

煙の向こうから、無数の指。

はやてとフェイトはとっさに防御するものの、何箇所かを簡単に砕かれて軽傷を負う。

一瞬怯み、そこへ容赦なく攻撃が加えられる。

「はやてちゃん！ フェイトちゃん！」

なのはが飛び出し、一人まとめて無理矢理突き飛ばした。

「なのは！？」

「なのはちゃん！！」

身を案ずる一人の心配を他所に、指がなのはの脇腹や頬など、体の数箇所を掠める。

痛みに顔を歪めて、俯くなのは。

『スパークア！』

「なのはーー！」のヤローーー！」

ヴィータが咆哮し、なのはの前に躍り出て未確認たちを追い払う。だが背後から接近した指に気づかず、もろに脇腹に喰らった。

「うぐう・・・・・」

「・・・・・・・」

なのははと顔を上げて、負傷したヴィータを田に捉えると、

「ああ、もう我慢できなーー！」

口角を吊り上げて、諦めたようにそう呟いた。

次の瞬間
一陣の風が吹き抜けた

— ! ? —

未確認の一体が、ガス体から引きちぎられ、その醜い姿を露にした。驚づかみにされているそれは、必死になつてもがいている。動きが見えなかつたが、一同が驚いたのはそこではない。その捕られ切れなかつた動きを行つたのは、

「なのは?」

直後、なのはは未確認を掴んだまま、微動だにしない。

グシャツ

徐に、未確認を握りつぶした。

なのはがとつた突然の行動に、困惑と混乱が広がる。

「効率悪くない?」

声をかけようとしたフェイエイトを無視。

悪魔の亡骸から出てきた紅い石を握りながら、未確認たちに話しかける。

「わたしが目的なら、わたしだけ狙えればいいじゃない？」「アリサちゃんとすずかちゃんを？」

どこかおどけた様子で未確認に問いかけるのは。
一方の未確認たちは、それに攻撃で答えた。
先ほどまでのものよりも、速く、鋭い突き。

なのははそれを簡単に避けながら、ため息をつく。

「やつ、ならお偉いさんに直接聞くよ」

再び一陣の風。

未確認達の動きが停止すると共に、塔の方に近づくのは。
その服装や武器は、大きく変わっている。

白いコートに黒いズボン、胴体のインナーは普段のバリアジャケットと同じだが、全体的に男のような格好をしている。

そして極めつけは、彼女の愛機レイジングハートだった。
杖の形をしているはずのそれが、白銀の刃を携えた巨大な剣になっている。

そしてその刀身には、わずかに血がついていた。
なのはの目の前には、『最後の一休』の未確認。
おびえた様子でこちらを見る相手に対し、腰から真っ白なそれを取り出して銃口を向ける。
そして不敵な笑みを浮かべながら、

「Jack Pot!-!」

一気に、未確認が全滅。

なのはは慣れた手つきで銃を振り回し、そのままの勢いでホルスターに収めた。

呆然とする一同に振り返り、満面の笑顔を向けて、

「そういうわけだから、みんなは関わらないでね？これはわたしの問題だよ」

おどけた様子で笑いながら、やつれと先に進んでしまった。

第一話塔（後書き）

ところがついで一話でした。
誤字脱字、ツツ「ミミ」があれば感想へどうぞ。

第一話危機、上巻下(前書き)

調子いいこり、もうこいつちよ。

銃弾が舞い、刃が踊り、鮮血が散る。

白い「コードが汚れるのを氣にも留めず、なのはは突っ走っていた。
目の前に、敵。

なのはは勢いを殺さずに飛び上ると、壁を伝つて駆け上がつてい
く。

そして後ろに回つた瞬間、鉛弾を撃ち出した。

蜂の巣になつた敵に目もくれず、なのはは再び駆け出す。

あのあと、フェイト達より早く塔に到着したなのはは、まっすぐに
頂上を目指していた。

立ちはだかつた敵は即座に斬り捨てたため、彼女が通つた後には大
量の砂と血痕が残されている。

閑話休題。

やがて、目的地の頂上が見えてきた。

いてもたつてもいられなくなつたのか、なのはは目の前にいた敵を
倒さず踏みつけて進む。

そして最後にいた死神を思わせる巨大な敵をも踏み台にして、大き
く跳躍した。

それなりに高く上がつたお陰か、頂上の全体が見渡せる。

円形の床の隅の方に、アリサとすずかを発見。

向こうはこちらに驚いているようだが、なのはは一人が無事である
ことにほっとする。

次に、円の中 心近くにいた男を確認。

聞いていた通りの容姿と一致し、また彼について何か思い出したのか、眉間にしわがよつていた。

最後、円の中央。

自分と同じ亞麻色の髪を揺らし、自分と同じ顔立ちの少女が、刀を携えて立っている。

滯空している数瞬の間に、これら全てを確認したのはが着地した。と同時に、少女がゆっくり目を開いて、なのはを見つめた。

「・・・・・久しぶりね、なのは」

「うん、久しぶり、さくや桜夜」

立ち上がりながら、なのはは笑つて答えた。

それから辺りを見回してから、両手を使いおどけた仕草を見せて、

「なんでアリサちゃん達を拉致ったのかな？」

「扉を開くには生贊が必要よ」

「扉つて・・・・・魔界はおじいちゃんが封じた、そりや一度は解かれたけど、そこはお父さんが何とかしたはずでしょ？」

すると少女 桜夜は、刀を構えて、

「だから開くの、もう一度開いて、わたしは完全な悪魔になる」

「・・・・・いや、そこは完全な人間になるつて言つておいつ？」

？」

「嫌よ・・・・・忘れたわけじゃないでしょ？力があればお母さんを・・・・・」

「・・・・・」

一人はそれっきり、黙ってしまった。

が、やがてなのはが口を開き、

「もつ過ぎたことだよ、それに、今まで扉を開けば、今度こそ世界は悪魔に…………」

「多少の犠牲は病むを得ないわ」

「世界一つを多少つて…………大物になつたねえ」

しみじみと、なのはが言つた瞬間。

桜夜がなのはの目前に現れた。

直後に、金属音。

「いきなり？ 大胆さも兼ね備えたかな？」

「こ」の塔が何かを知つてゐるあなただからこそ、消えてもうついでに・・・・・

「やだよ、これはわたしの、自分のを使えばいいじゃない」

両手で二丁銃を回転させながら刀をいなし、距離を取る。背中に収めていたレイジングハートを抜き放つと、刃を打ち合わせた。

「一つ無いと意味を成さないの」

「だつたら諦めなよ、アリサちゃん達も解放してくれるとうれしいな」

「出来ない相談」

「残念！」

軽口のような口調で話しているものの、体は殺伐としたやり取りを行つてゐる。

弾き飛ばし、振り下ろし、横に薙いで、斬り上げる。

「腕は落ちていないようね？ さぞ平和なところにいたんだから、鈍つてやしないかと冷や冷やしてたわ」

「にやはは、だつてこっちの都合なしに『みんな』よつて来るんだもん、落ちるものも落ちないって」

「それもそうね」

突然、桜夜が何かの銃を取り出して、発砲。

なのはも負けじと銃を構えて、飛んできた弾丸を全て撃ち落す。

「銃、使わないんじゃなかつたの？」

「戦略的には持つていたほうがいいの」

「なるほど」

銃を仕舞わないまま、なのはは続けて発砲した。

が、桜夜は回避行動を取らず、刀を下に構えると、くるくると回し始めた。

刀が描く軌跡に絡め取られ、弾丸が受け止められていく。

そしてそれを地面に並べると、刀を大きく振つて、弾き飛ばした。

なのはに向かう、無数の弾丸。

しかしながらは慌てる素振りを見せせず、むしろ不適な笑みを浮かべて、レイジングハートを振り下ろす。

弾丸が全て切り裂かれ、なのはの後ろにあつた柱を破壊した。

「……………何？これ」

一連の出来事を見守っていたアリサ達は、呆然とするしかない。

確かなのはは、砲撃中心の後衛タイプだつたはず。

それがどうだ？ 普通に大剣を使っており、しかもかなり高レベルの斬り合いを行なつてているではないか。

「…………ビーなつてんのよ」

塔の事と言ひ、田の前の一人のなのはの事と言ひ。

手を縛られているといつのに、頭を抱えてしまつたアリサだつた。

塔の下層。

開けた空間に、フェイトは一人で立つていた。

なのはが変貌して先行した後、あの異形達が市街地に向かつて突進を始めてしまい、それを抑えるためにどどまる必要が生まれてしまったのである。

しかし、仲間であり重要な参考人でもあるなのはを放つておくわけにも行かない。

その折り合いが付く点として、フェイトが塔に向かうこととなつた。

現在、塔の一階と思われる場所にいる。

「…………静かすぎるよつな気が」

猫、鳥一匹いない。

変わりに、背筋を撫でるようなねつとりとした気配が蔓延していた。一瞬怯んだものの、フェイトは唇をかみ締め、表情を引き締めてから前に進む。

進もうとして、足を止めた。

「…………？」

背後から、何かが動き回る音が…………。はつとして後ろを振り返ると、

ツ！！

見事な大口があつた。

間一髪のところでよけたフェイトだが、床が砕けている光景を目に見て、サッと血の氣が引く。しかしそくに氣を引き締めると、目の前の敵を見据えた。

百足を思わせる、巨大な虫。

今しがたフェイトを捕らえかけた巨大な顎は、中が青白い。フェイトは、相手の全身から滲み出ている威圧感に後ずさりしきけるが、バルディッシュユを振りかぶって果敢に挑む。

「ハーケンセイバー！」

大きく振つて刃を飛ばすが、百足は身体を震わせて弾き飛ばした。どうやらあの甲殻は、かなり頑丈らしい。

おかげしと言わんばかりに、身体の節目から紫色の光弾を乱射した。フェイトはそれを回避、バルディッシュユに命じカートリッジを消費すると、自身の周りに金色の短槍を出現させると、発射した。

が、それも弾かれ、フェイトは強烈なタックルを受けた。
遠く吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

続けて、また口を開き食いつこうとする百足。
流石に追い詰められたかと思いもしたが、フェイトは咄嗟に頭を下
げ、自分から床に落下。

全身を打撲したが、回避には成功。

必死に物陰へ駆け込む。

百足はフェイトを見失つたらしく、しばらくの間キヨロキヨロとし
ていたが、やがてその場を去つていった。

「…………はあっ…………はあっ…………

二度も死に掛けたことが堪えているのか。
フェイトは体を抱きしめて、じぱりく震えていた。

『Are you okay? sir』

「…………」めん、大丈夫

バルディッシュにそう答えてから、立ち上がった。
辺りを見回してから、百足の不在を確認し、ほつとする。
そして周囲を警戒しながら、進み始めた。

「ふつ！」

「二二七」

未だに続く
なのはと桜夜の戦い

銃撃も加えられてした单には
もにや藝術のみのふ一かに合しにな
つていた。

亦同士が打たるゝに、時折直にぐる音を立てる。

西者ともは一旦過ぐとなのはは下は振り下す一閃を
桜夜は上に振り上げる一閃を繰り出す。

そして、一際大きな金属音が響いた瞬間。

・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・
・ ・

派手に回転しながら宙を舞うレイジングハート。

赤夕赤夕と、眞赤な血が地面に落ちる。

アリサとすすかを驚愕せしむるに、今でこそ流れ出る量は少なしか
十分すぎた。

・・・・・ぬるま湯に漬かりすぎたわね

二
十九

口元から血を流しながらも、なのはは笑みを絶やさない。桜夜は冷たい目でそれを見下ろすと、刀を抜き放った。血が撒き散らされ、アリサとすずかは声がない。

俗に『アリバシテ』と呼ばれるそれを、桜夜はもぎ取る。何とか阻止しようとしたのが、なのはが手を伸ばしたが、刃を以つ

て邪魔され、叶わない。

「…………や……………つ……」

「いやあ……なのはあ……」

仰向けて倒れたなのはに駆け寄るアリサとすずか。
未だ血が流れている腹部を必死に押さえながら、アリサは桜夜を睨みつけた。

「…………何?」

「何でなのはを!?」

「邪魔だから、としか言えないわ」

なのはから回収したアミコレットを男に渡しながら、桜夜は振り返りもせずに淡々と返事する。

「…………つ!」

頭に血が上ったアリサは側に突き刺さっていたレイジングハートを抜いて、桜夜に向けた。

桜夜は黙つたまま、刀に手をかけて、

「…………止めを刺しておきましようか?」

アリサの横を、風が吹き抜けて。

後ろの方で、何かが突き立てられた音がした。

調査を進めていたフレイトは、廊下の突き当たりに何かあるのを見する。

気になつた彼女は、バルティッシュを構えて周囲を警戒しつつ、奥へと進む。

そこには、心臓に剣を突き立てられ、苦しんでいる女性の像があった。

「・・・・・趣味が悪い」

思わずそう呟いた時、

『我が名はアラストル』

「・・・・・っ！？」

振り向いても、誰もいない。

空耳かと思い来た道を戻ろうとしたが、

『力無き者はその心臓を贅とし、我に永遠の服従を誓え』

今度は、はつきり聞こえた。

どこから語りかけてきているのかと、もう一度振り返つた瞬間。ドスつと、胸の辺りに衝撃が来た。

「あ…………あ…………！」

すずかの腕の中。

なのはが、胸の中央に刀を突き立てられている。
桜夜は機械の様な冷たい表情のまま、柄を捻つた。

「…………ぐ…………あつ…………！」

なのはの口から、苦い声が漏れて。
それつきり、何も言わない。

「なのははちゃん…………？…………なのははちゃん…………？」

すずかが、恐る恐る声をかける。

なのはが死ぬはずないと、自分に言い聞かせながら、話しかける。
だが半開きになつたなのはの口は、動かなかつた。
涙が、ボロボロこぼれて来る。

どうして、いうなつた。

どうして、いうなつた。

直後、

その頃、海上。

必死に防衛ラインを張つてゐる守護騎士とはやて達は、田の前の異形に苦戦していた。

少し前からさりとて、鎌を振りかざす、またに死神と言える容姿の固体が加わったからである。

標的を指で刺すだけの異形とは違い、鎌を持ち、時折瞬間移動を使つて背後に回りこむ。

他のものにすら決定打を見出せていないとこのへん、さうて頭脳プレーまでしてくるというのは、正直致命的だ。

「つしまつた！」

そしてついに、異形のうちの一體がラインを突破して、市街地に向かう。

追撃しようとも、今離れてしまえば、確実にラインは崩れる。全員が、苦虫をつぶした表情になつたときだった。

どこのからともなく、ヒューン、と笛のような高い音が近づいてくる。

派手な音を立てて、
派手に爆散する。
ラインを抜けた異形に何かが命中し、これまた

卷之二

はつと、飛んできた方向を振り向くと、

- 109 -

波間に爆走しているジエットスキーが見えた。二人の女性が跨つており、内の一人が未だ煙を履いている口ケットランチャーを構えている。

一瞬ぽかんとする一同、だがすぐにはやてが声を張り上げた。

「あかん！」この先は危険や！退いてください！..」

しかし、女性達は耳に入れず、というか、はやてを見ようともせず、さらにスピードを上げる。

すると、ジョットスキーを運転していた金髪の女性が、ハンドルから手を離した。

（なんちゅう無茶苦茶やる人達やーー！）

一
だめ！逃げて！！

もはや悲鳴に近い大声で、叫んだとき。

プラズマが走り、雷のじんとへ空気を裂いて、ほとんどの異形を一掃する。

「・・・・・ふふ？」

呆然としたはやてからり出でてきたのは、そんな間抜けな声だった。

第一話危機、上ヒド（後書き）

若干グダグダな気がするけど、気にしないでもらえるとありがたいです（苦笑）

今回おのー方が登場。

あと、心臓に剣が刺されるのは恒例行事だと思つていてるわたしつて何でしょー？

第二話復帰（前書き）

思ったより早くネットが復活できました～！！

「・・・・・」

血だまりを広げながら、かろうじて生きている思考回路で考える。今自身の胸に突き刺さっている、銀色の剣は、一体何なんだ？ 疑問を口にする体力は無い、なので、それに答えをもらえることも無かつた。

だんだん冷たくなっていく体、視界と一緒に思考もぼやけてきた。

『やはり、人間ではだめか・・・・・あの男が懐かしい』

あの男 誰なんだろう？

そこでフェイトは、意識を手放した。

必死になつて、現実を受け入れようとしていたすずかの思考が、中断する。

いや、中断するというより、止められた、が正しい。
すずかの首に手刀を入れた桜夜は、傾いたすずかの体を受け止めて、抱き上げる。

それから男のほうを振り向いた。

「あとはどうする？」

「贊はお前が抱えているほうの娘でいいだろう、そこで呆けている娘は元々、そいつをおびき寄せる餌だからな」

一
九
二
三

桜夜は素っ気無く返事して、男の下に歩いていく。

「後は悪魔達が始末するだろう、放つておいて構わんよ」

最後に男がチラシヒアリサとなのはを見てから、嘲笑をこめてそう言い放ち、桜夜とともに去つていつた。

「……………」

やつと立ち直ったアリサは、動かなくなつたなのはに駆け寄り、手

幾分か熱が残っているとはいえ、そことするとほど冷たい

「うめんね・・・・・あたし等のせいで・・・・・うめんね・・

涙ながらに、謝罪を繰り返した。

魔法のことを知っているだけで、それ関係の才能が無い、相談に乗ることしかできない自分が歯痒かつた。何故自身に力がないのかと、悔やんだ。

死人に口無し』の通り、なのはは羨みも慰めもしない。

それでもアリサは譲らなければいけなかつた。彼女ははいられなかつた。

すっかり冷たくなった手を
わすかに残した熱を守るよ／＼に
必死に握っていた。

そんなとき、周囲に気配。

背筋をなぞる、ねつとりとした感覚。ばつと顔を上げると、囮まれていた。

鎌を盛つていたり、棺桶を抱えていたり、人の形をしているものの、人ではないもの達が、まるで品定めするように見ている。赤く鈍く光る全ての目が、確実にアリサを捕らえていた。

「 つ……！」

本能的に恐怖を感じたアリサは、思わずレイジングハートを構えた。大剣故のずつしりとした重みが、アリサの華奢な両腕に負荷をかける。

アリサは一瞬表情を歪めるものの、すぐに表情を引き締めた。

分かっている、剣どころか、何の武術もかじっていない自分が、すぐ死ぬのは分かっている。

だが、少しでも抵抗の意思を見せないと、なのはに申し訳ない気がした。

「…………ちょっとだけでいい、力を貸して、なのは…………
・・・」

そう懇願した瞬間、異形達が飛び掛つてくる。

夢を、見ていた。

いつか、闇の書に閉じ込められたときに見た、夢。

自分も、アルフも、アリシアも、リースも母も。

みんなが笑つて、穏やかな時間を過ごす、そんな夢。

だが、少し内容が違つていた。

みんなで街にショッピングに出かけた直後、あの異形の群れが襲いかかつてくる。

アルフ、母、リースが必死になつて守ってくれるもの、決定打を打えられずに、傷ついていく。

やめろ

貫かれるリース。

やめろ

不意をつかれて死ぬアリシア。

やめろ

駆け寄ろとしたアルフも絶命。

やめろ
やめろ

最後に残った母も、自身を庇つて死んだ。

異形達は嘲笑うようなうるさい鳴き声をあげる。

自身の周囲には、四つの屍が転がつた。

そこで、フロイトは気がつく。

自身のような、母さんのような人間は、生み出してはならない。

あの日なのはに手を取つてもらつたように、自分も手を取ると決めたのだ。

何の恩も返せず、こんな石造りの床の上で寝転がるのが、望んだ最

期か？

否
！
！

・・・・・・・

立ち上がれ、フュイト・T・ハラオウン。

— あくろ あくろ —

こんな所で這い蹠るな

か あ こ う

立せられ 立せられ

おお」

少なぐとも
ここが終着点ではなし――

突き刺さしてした食を力ずくで引こ抜き、呪嘆をあげる

『なんと・・・・・人間の小娘が、
我を振るう資格を手にしたと
いうのか！？』

覚悟を決めたアリサが、レイジングハートを振り回そうとした瞬間。すぐ背後で破裂するような音がして、異形を一気に何体も葬る。何事かと振り向いたアリサの手からレイジングハートが没収されて

「Blast!!!」

目の前を、異形が吹き飛んでいく。
視界に広がるのは、真っ白なコート。
それはこちらを振り向いて、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

「アリサちゃんごめんね、お待たせ！」
「…………っー？」

アリサはかなり驚いた表情で、先ほどまでなのはが倒れていた場所と、今なのはが立っている場所を交互に見る。
そんな彼女を見て、なのはは苦笑いして、

「ごめん、ちょっとびっくりしたかな？」

『A dove becomes the expression
that Gatling drank (鳩がガトリングくらつ
たような表情になっていますよ)』

笑顔のまま、後ろの異形を斬り付ける。

「もー、ちょっとは空氣読んでよーせつかく再開を喜んでたのにー。
『You must die!!! (こつそおつ死ね!!!)』

慣れた手つきでレイジングハートを振り回し、アリサと自分に寄つてくる異形をことごとく斬り伏せる。

すると、徐にレイジングハートをブームランのよひに投げつけ、ホルスターに収めていた銃を取り出した。

開いた片手で戻ってきたレイジングハートを背中に収め、さらにもう一丁銃を構えて、

「今飴玉は切らしているのー。鉛玉で良ければたつぱりどうぞー。」

『It is taste slowly and carefu

lly! ! (じっくり味わいなーー)』

まさに爾あられ。

嬉々とした表情で撃ち出されたのをそのままの当たりにしたアリサは、後にこいつ語っている。

「・・・・・銃つて、あんなに連射できるんだね

「・・・・・はあつ・・・・・はあつ・・・・・はあつ・・・
・・・・・」

まだ痛む胸を押さえながら、フロイトは先ほど抜いた剣を支えに蹲

る。

乱れた息を整えながら、皿の手に収まっている鰯を見つめた。

『まさか、あやつ以外で我を従える人間がいるとは・・・・・驚嘆に値するぞ、小娘、名は何と言つ?』

はあ……………

「アーヴィングが、我が姫アリスナ、雷の魔剣を……」

雷。

真っ先に考えたのは、自分にひつたりだということ。
もちろん長年の相棒バルディッシュも自身に合わせて作られた愛機
だが、目の前のアラストルと名乗った剣は、少し違った。
バルディッシュと違い、手にした瞬間、自身の物だと理解できたの
だ。

何故だか分からぬ、理由の付けようのない感覚に少し戸惑うもの、新たに手に入れた力だ。

ありがたく使わせてもらおう」と、フロイトは考へていた。
バルディッシュとアラストルを手に歩みを進め、先ほど百足に襲わ
れた広間に出了とき。

一瞬、反應。

先ほどまでフエイトがいた場所に、鎌が突き立てられていた。

真っ赤な外装のそいに、は
鎌を抜きながら、コイントを見据えては
らゆらと動く。

『ほう、ヘルニアストか』

「つ知つてゐんですか！？」

『もちろんんだ』

異形 ヘル＝ラストといつらの攻撃を避けて、フェイトは大きく跳躍。

後方に下がつて、構える。

『ちょうどよいフェイト、我を振るえ』

『え？』

『お前のそれを侮辱するわけではないが、そいつよりは役に立つぞ？』

右手に持つていたバルディッシュュに目をやる。

確かに、こちらが扱う魔法はあまり効いていなかつたが……。

目前に迫るヘル＝ラストと、両手の武器を見つめて、少し考え込んだ後。

「・・・・・バルディッシュュ、モードリース

『Yes』

戦斧が逆三角形のプレートとなり、左手に収まつたのを確認して、アラストルを構える。

「アラストル、お願ひします、バルディッシュュは補助を！」

『承知！』

『Yes sir!-!』

足に魔力を込めて、駆け出した。

不規則な機動を描く鎌の間をすり抜けて、すれ違ひ様に一閃。

すると、ヘル＝ラストは面白いほど綺麗に、真っ一つに斬れた。先ほどまでは違う結果に、フェイトは少なからずも驚きを浮かべる。

だが戦いは終わっていない。

すぐに引き締めて握りなおすと、再び飛び出す。

「はあっ！－！」

続けて次の個体にアラストルを突き立てるが、上に放り投げた。そして自身も飛び、強烈な縦一閃を見舞う。

その勢いで着地したフェイトは、ここで待機状態にしていたバルディッシュを起動。

『何をしてある！？お前の魔法では・・・・・！』

「分かっています！」

フェイトはアラストルの叱責に似た問いかけに手早く答えるが、持っていたバルディッシュを大きく振るつた。

飛ばされた衝撃波をもろにくらい、その場にいたヘル＝ラストが全て浮き上がる。

「バルディッシュ！－！」

『sonic move』

金と蒼の雷が走り、次々葬られていくヘル＝ラスト。再び大きく跳躍したフェイトは、剣を大きく振り上げ、

「ああああああああ！－！」

雄叫びとともに、振り下ろした。

着地したフエイトは、アラストルを背中に収める。そして周囲を確認してから、まつ毛の髪をついた。

が、しかし、

ザザザザザつと音を立てて、フェイントに何か粉のよつなものが降りかかる。

その「うちの」「しく」からは、「」の中に入り込んでしまった。フェイトは本能的な判断で、必死に吐き出しながら口元を拭う。

「な、これ、砂・・・・・一?」

・ヘリコントラストは砂を媒介に人間界へ限界する……………倒した

「そ、そ、そ、う、な、ん、で、す、か、・、・、・、・、・、・、」

まだジャリジャリする口で、フヒトイチは少ししゃべつてしゃうであります。

『まあ、初めての対魔戦としては、上出来であるな』

惡魔

た、数々の異形を

- 10 -

アラストルにそう言われ、思い浮かべるのは最初に接触したガスの体を持つ個体と、先ほどの巨大な百足の様な個体。

(せりきのにも、名前があるのかな・・・・・?)

早速、アラストルに質問して見た。

『ガスの体に虫の様な本体・・・・・おそらくメフィストと呼ばれるものだ、本体が小さい故に狙い難い上、伸縮自在な指を操る』
『巨大な百足のようなものはギガピード、本来魔界に生息する生物なのだが・・・・・おおかた、この塔に出現に居合わせ、紛れ込んだのだろうな』

メフィストに、ギガピード

今後必要になる情報を頭に刻んでから、質問を続ける。

「じゃあ・・・・・この塔は、何？」

『テメンニグル、別名恐怖の土台と言われる魔界への入り口の一つだ』

「恐怖の・・・・・」

ふと上を見上げてみると、高い天井が目に入る。

「なのはは、一体何を・・・・・？」

知らずの内にぽつと呟いて、前に進んだ。

第二話復帰（後書き）

今回書きたかったのは、クレイジーなレイハさんと、砂まみれになるフエイトさん（キリッ）。それじゃ、感想お返事～。

ウインド様

わーい、同士様～ww（

ダンテの登場はもう少し待つてくださいねww

縁異様

ですよね～ww（馴れ馴れしい

アラストルとフエイトって相性良むけだなつと思つて、テメンングルに置いときましたww

はい、ハゲ生きてましたww

テネシー様

スパークダの血族つてのは、我ながら名案だと思つていたりwwあと、桜夜の名前に關してですが、なのはと対にしたかったので、あえて漢字にしています。

それでは、次回もお楽しみにっ（）

Г · · · · ·

「……………」
「くわつと目を開く

第四話 とつあえず、合流

「Ｈｏ・Ｈｏ・……」

次々沸いてくる異形を、なのはは次々斬り倒していく。大剣ならではの豪快な攻撃、そつとは思えぬ細やかな突き。時折口ケットのような飛び蹴りや拳を繰り出して、敵を纏めて吹き飛ばす。

「・・・・・」

その光景を目の当たりにしていたアリサは、もう畳然とするしかなかつた。

一方のなのはは、アリサをそつちのけにしているよつて、そつちに護つていた。

今だつて、アリサに近づいた異形を、尽く蜂の巣にしている。

「ひつ・・・・・！」

衝撃に耐え切れなくなり、目の前で破裂した異形。

アリサは、目の前で仮にも生き物が死んだことと、自身が死んでいたかもしれないことの一重の意味で、悲鳴を上げた。

亡骸に出現した紅い宝石を、疑惑の目で見つめて、なのはに視線を戻すと、

「・・・・・・ちよつ、なのはー？」

何故だか追い詰められていた。

柱を背にしたなのはに、複数の異形がにじり寄つてゐる。

とこりうか、セツキまでの威勢はどうしたんだろうか？
あれだけ圧倒していただろうに。

『It is in a seed and a somewhere
unsavory situation getting carried away too much. (調子こいたツケ
が来ましたね、友人の前とはいえ、少々張り切りすぎました)』
「だねえ～」

明らかにまずい状況なのに、のほほんとした顔で愛機と会話するのは。

「・・・・・　おい」

そんな彼女に、アリサは突っ込まずにはいられなかつた。
が、なのはからの援護がないといつことは、自身も危ないといつことである。

まがりなりにも、一企業のトップの娘であるアリサは冷静に、確認
のために周囲を見渡した。

この場にいる異形は、先ほどに比べて三分の一に減つてゐる。
そのほとんどがなのはを追い詰めに掛かつてゐるが、残りの3～4
体はこちらを狙つていた。

幸いなことと言えば、背後を取られていないことだろうか。

しかし、先ほどのなのはの戦闘を見る限り、目の前の異形達は砂さ
えあればどこからでも沸いてくることが出来るようである。
試しに後ろを確認すると、大量の砂が山を作つてゐた。

（・・・・・ 最悪）

思わず苦笑いをこぼして、目の前の異形と向き合つ。

無手の二ちらに對し、向こうは全身が凶器。

一部の人間が使用する言葉を借りるなら、ムリゲーである。

そんな中で、アリサは覺悟を決めて。

思考をめぐらせ始めたときだつた。

「…………ショーガないか

「え？」

喧騒の中で、友人の諦めたような声が、はつきり聞こえた。
アリサが反応して、意識を現実に戻した瞬間。

異形が一斉に、砂と体液を派手に巻き散らす。

「…………は？」

「にやははっ、あーあ、アリサちゃん砂まみれ！」

いつの間にか目の前に現れたのはは明るく笑いながら、アリサの頬についた砂汚れを拭う。

「あ？ああ、ありがと…………じゃなくて！」

びしつと突つ込み、息を整えてから、

「一体何よ！？あんたのそつくりさんが出てくるわ、あんたが死んだと思ったらさらっと復活してるわ、砲撃中心のはずなのにフツーに剣使ってるわ！あんたなんわけ！？」

「高町なのはっていう人間だよ？」

「そーいう話じゃなくて！！」

「どういふ話？」

「だーもーー進まねーー！」

ここは仮にも戦場だといつに、ボケ（？）と突つ込みの押収が和やかに繰り広げられていた。

だからだろうか、アリサはそのときは『氣』がつかなかつた。

なのはが『人間』の単語を口にしたとき、少し表情が翳つたことを。

「はあーー！」

一閃。

アラストルの一撃が、悪魔を一掃する。

雷撃がほとばしり、フェイントが通つた通路の床や壁には、派手な切り傷が刻まれていた。

『ふむ、あの男ほどではないが、お主もお主でなかなかやるなあ？』

『そう、ですか・・・・・・・・』

アラストルを背中に納めて返事をしてから、ふと、フェイントは疑問を口にする。

「あの、あなたがいう『あの男』って一体……？」

『そういえばお主は知らなかつたか……とはいえ、魔界や悪魔に精通しているものであれば誰でも知つてはいる有名な人物だがな』
「どんな人なんですか？……」

『彼』が一度頷くような声を出してから、フェイトは現れた悪魔を切り伏せる。

その一匹を皮切りに、また次々と沸いて出てきた。彼らはさきほどからこの繰り返しであり、今となつてはもう慣れてしまつたといふか、なんといふか。

『大半の悪魔は殺すことを娛樂とし、快樂としている、故に魔界から人間界にやつてきては、無力な人間に對して一方的な暴力を振るう』

『しかし……』と、アラストルが区切ると、フェイトのハイキックが悪魔を吹き飛ばした。

『もちろん人間も黙つてやられてはいるわけではない、故に、悪魔を狩る者……』^{デビルハンタ}悪魔狩人が出現し、人知れず人間を守つているのだ

「…………もしかして、あなたの言つ『あの男』も？」

『そう、悪魔狩人だ……それも『最強』がついた、とてつもなく強い、な』

フェイトの脳裏に、筋肉隆々のガタイのいい男がアラストルを振り回す光景が浮かんだ。

少なくとも、アラストルが心臓に突き刺さつて生き残るような人物だ。

そんなものが最強だと言われば、素直に頷いてしまいそうだった。

『奴はこれまで四度、世界を救っている…………本人はそのつも
りは無いらしいが』

そつ言つアラストルの声は、呆れながらもびいか懐かしそうで。
フュイトは思わず、くすりと笑う。

『しかしここ最近はなりを潜めてこらしにな…………一体何が
あつたのやら…………』

「…………つ…………」

そのままの声で、アラストルが続けた瞬間。

目の前で通路の壁が派手に破壊され、砂埃が舞つた。

フュイトは思わず構えて、神経を研ぎ澄ませる。

煙の向こうで、動く気配。

「つたああああつ…………」

こちらに向かつてきたそれに、躊躇なく刃を振り下ろした。
受け止められたとはいえ、手ごたえ有り。

『…………の氣配、もしゃ…………』

衝撃で、砂埃が晴れる。

そこにいたのは、

「あれ？ フュイトちゃん？ つていうか、それ…………
「フュイトなの…………」
「つなのな…………？」

なのはと、それに連れられたアリサだった。

なのはは大剣と化したレイジングハートでアラストルを受け止めており、驚いた表情を見せてている。

フェイドは一瞬ぽかんとしたが、すぐに剣を引いて背中に収めた。

「ごめん、ここまで敵だらけだったから、つい……」

「いやあ、いいよ、それよりちょうどよかつた、アリサちゃん頼んでいい?」

「つちよつと待ちなさい……！」

笑顔のまま、フェイドにアリサをまかせようとするなのはだったが、当の本人は拒否の声を上げる。

「まだあんたのこと聞いてないわよ！？そつくりさんのこととか、その格好とか、剣刺さつても平気なところとか！？」

「剣！？」

確かに今のは不明な部分が多いが、フェイドはそれ以上に、剣が刺さつたというフレーズに驚いた。

「アリサ、剣つて一体！？」

「それが！なのはがこの格好で助けに来ててくれたまではよかつたんだけど、あたしとすずかを拉致つたなのはのそつくりさんが、なのはに剣を突き刺したの、しかも胸に！！」

「つ本当なの！？」

「・・・・・本当だよ」

詰め寄るフェイドに、なのはは少し申し訳なさそうに笑つて答える。

「でも大丈夫・・・・・傷はもう無いし、別に問題はないから」

「傷が無いなんて、あるわけない！－のは、ここは…………」
「それよりも

なのははフロイトの言葉を明るい声でわざと遮り、背中のアラス
トルを指差した。

「それ、アラストルでしょ？ フロイトちゃんこそ、よく無事だったね」

『よく無事だつた』と口にするということは、アラストルとの契約方法を知つている者のみ。

『・・・・やはつ、か』

ここで、今まで黙っていたアラストルが声を発した。

「初めましてアラストル、なのはです」

『なのは・・・そうかお前が・・・ダンテは息災か?』

はい、たまに連絡が来ますよ、多分今頃中東あたりじゃないかな

1

のんきな声で、親しげに会話をするなのは…

アラストルは、ため息のようなものについて答えた。
くすくすと、もう一度なのはが笑つてから、表情を真剣なものに切

それをフュイトに向けて、

「フヒイトちゃん、アラストルも、とりあえず忠告ね」

「…………な、なに？」

『…………』

いつになく真剣なそれに、フェイトは思わず身構える。なのはは一呼吸おいてから、

「トコガ引き金だけは、使つちゃ駄目」

「…………え？ ちよつと、それどうこう……」

『「こと？」』と続けられなかつた。

フェイトと、今までの成り行きを見守つていたアリサ、二人の視線の先。

つこせつさまで会話を交わしていたなのはの姿は無い。ビニに？、と、一人が顔を動かしはじめると、

「！」

通路の突き当たり、四つ角になつてゐる場所。

はるか離れてゐるそこから、元気な声が聞こえた。

そこにいたなのはは無邪気に手を振つてから、開いてゐる手を口にそえて、

「フェイトちゃんー！アリサちゃんを安全なところまでよろしくーー！すずかちゃんはこつちで助けるから、心配しないでーーー！」

「ちよつ・・・・・」

「どうやつて・・・・・ーー？」

「あとーーー！」

こちらとあちらを交互に見てうろたえる一人を他所に、なのはは続ける。

「人の家庭事情に首突つ込むと、嫌われるよーー！？」
「つ余計なお世話じやああああああーー！」

アリサの突込みをものとせず、無邪気に笑いながら去っていくな
のは。

フェイトはしばらくの間呆然としてから、

「・・・・・・・なのはつて、何？」
「ああ？」

第四話といつあえず、合流（後書き）

大変長らくお待たせし、申し訳ありません、四話でした。
言い訳すると、いろいろとむづかしく悪化しちゃつて思つので、あえて
何もいいません。

それでは、お返事いきます。

お待たせしました、すみません。

Tea = River様

あの男の実子なら、これくらいこなしあげてもいいとおもこます（
キリツ
孫娘かどうかは、後ほど詳しく書くと思つので、行く末を見守つて
くれると幸いです。

DevilStrikers様

『血族入りさせちゃええば、規格外な魔力量も説明つくんじゃね？』
と思ったのが始まりだつたので、ぶつちやけ自己満足的なものです。
あと、DMCといえば、キャラクター達のはつちやけつぱりでしょ
うwww

珈琲牛乳愛飲者 来栖様

なのはさんをスタイリッシュに書けていいよつで、一安心です。
血族式成人式wwwwwwじやあなのはさんとフロイトさんは成人した
のかwww

ネヴァンがくると予想していただいたようですが、鎌の二刀流
つて面倒くさそうだなつと思つたので、あえてアラストルにしました。
た。

あと・・・はつちやけたレイハさんに笑つた時点で、あなたはわ
たしの術中にはまつた！！！・・・すみません。o(=^▽^=)o

わい、今回は「Jリーグ」で。

次回をお楽しみに、それではーー。

第五話はやて、考へる（前書き）

思つた以上に難産でした・・・・。

完結でやんのかこれ？（汗

第五話はやて、考える

アリサちゃんはフェイトちゃんに任せたから大丈夫。

今頃はやてちゃん達が保護しているはず。

すずかちゃんは・・・・あの子がうまくやっているだらうから、
大丈夫だとおもう。

あと、さつき知ってる人が一人も来たみたいだから意外と早く
収束しちゃうんじやないかな？

・・・・・とりあえず、

「わたしも一発入れないと」

『It cannot be forestalled・（抜け駆
けされるわけにはいきませんしね）』

自然と笑みがこぼれて、何でかテンションがあがつたので、速度を
上げることで発散しました。

「とにかく、アリサは安全なところまで送るから」

「わかったわ・・・なのはのことも気になるけど、この際しょーがないわね、あとで洗いざらい吐いてもらうんだから

！」

「あ、はは・・・」

あれから。

フェイトはアリサを外に送り届けるため、一路出口に向かっていた。アラストルを振るい悪魔を薙ぎ払いつつ、アリサを護衛し前進する。しかし、襲つてくる悪魔の個性が強いこと強いこと。刃を持つた案山子のような悪魔、素早い身のこなしで攻撃してくるトカゲのような悪魔。

人形のような悪魔に、体が燃え盛つた犬のような悪魔まで。

「どんだけバリエーションあるのよ！？」

『知るか、我ですら把握しておらんのだから』

あまりの種類の多さに突つ込むアリサ。

それに対しアラストルは少し呆れたような声で返し、フェイトは苦笑していた。

「…………う…………ん…………？」

氣絶していたらしい。

何かに揺られる感覺で、すずかは目を覚ました。
ぼんやりする頭で目を開き、ピントをあわせようと何度も瞬きをする。

やつとのことではっきりした視界は、少し変だつた。

天井と思われる壁が目の前にあり、その手前には見慣れたよつで見慣れない顔がある。

『顔』？

「…………！」
「…………つ」

思わず飛び上がつたすずか。

もちろんそれを抱えていた人物も、つられて崩れ、床に倒れこんでしまつ。

「…………驚くのは無理ないけど、少し手加減して欲しかつた」「す、すみません…………！」

すずかを抱えていたのは、先ほどなのはが戦つていた少女だ。

確か、桜夜と呼ばれていたはず。

すずかは自力で立ち上がりつつ、あたりを見渡した。
なんらかの廊下らしく、薄暗い。

目の前には桜夜と、スキンヘッドがいた。

「…………ついたぞ、ここだ」

どうやらあの後、いつのまにか連行され、いつのまにか彼らの田的
地にたどり着いたらしい。

巨大な扉が聳え立ち、その恐怖と威厳が隅から隅まで滲み出てきて
いる。

すずかは本能的にそれらを感じ取つて、思わず後ずさりした。

「恐れるのはかまわんが、逃げてもうつては困る」

重々しい口調で、スキンヘッドが口を開いた。

その重圧に思わず肩を跳ね上げたすずかを他所に、スキンヘッドは
続ける。

「しかし・・・・皮肉なものだな、スパークダが封印したこのテメ
ンニグルを、息子が解き放とうとし、その姪が再び封印

をやぶるわ」とあるとは・・・・」

「・・・・・・どうでもいい、わざと開けなさい」

「まあそつ急かすな・・・・」

男は、くつくつと嫌な笑い声をあげて、扉に手をかざした。
口をもじもじと動かし、なにかの言葉を唱えると、扉が震えだす。
扉が開き始めた瞬間、隙間から漏れてくる、ねつとりとした殺意。
すずかはそれに恐怖を覚え、一步一步後退し始めた。

「その後退は恐怖からか・・・・ふふふ、それもよからう・・・・
・ そう、恐怖だ・・・・その恐怖が、魔剣士の伝説

を作り上げ、人々の信仰を集めた・・・・」

途端にスキンヘッドは声を上げて、愉快そうに笑った。

「今度こそ……今度こそ手に入れよう……まあ、行くぞ」

「…………ええ……ほら、ここち」

桜夜はすすかの腕をつかみ、スキンヘッドに続いて扉をくぐっていく。

強引に引っ張られ、すすかはバランスを崩した。

倒れかけるも、桜夜が抱きとめてなんとか難を逃れる。

・・・・・その時、ちょうど互いに密着しており、たいていの小声なら聞き取れる距離にいた。

桜夜はそれを待っていたのかもしれない。

狙つたように、すすかに口を近づけて、

「…………めんなさい、でも、もう少しの辛抱だから
「え？」

疑問の声を上げて聞き返したすすかを無視して、桜夜は何事も無かつたように歩き出す。

その後姿を、すすかは懷疑の眼差しで見つめていた。

「はやて！！」

「つフロイトちゃんー？」アリサちゃんも！…」

塔の外。

アリサを抱え飛行していたフロイトは、無地はやて達と合流。シャマルにアリサを預けて、現場リーダーであるはやてに今までのことを報告する。

悪魔のこと、なのはと瓜二つの少女のこと、アラストルのこと、トメンニグルのこと。

現時点で知りえていることを、アラストルに補助してもうこながら話した。

それらを聞き終えたはやては、みるみる顔を驚愕に歪ませる。

「悪魔にトメンニグル、加えてなのはちゃんの豹変…………なんや、随分と密度濃い案件やな」

そうほやいて、顔をしかめた。

フロイトはこいつたん領いてから、

「それにアリサの証言によれば…………なのは、確実に心臓突き刺されたはずなのに、未だにピンパンしてるんだって」

「…………何それこわい」

げんなりと、はやてが返した。

その表情にフロイトは思わずつっこたが、何とか持ち直して、咳払い。

「でも、なのはが重要参考人であることに変わりは無いよ、そのそ
つくりさんのことも気になるし」

「せやね、今はとにかく、この案件の解決や」

「つていうか」と、はやは一咄で区切つて、

「フェイトちゃんも大丈夫なん? 今の話からすると、フェイトちゃんも心臓刺されたことになるんよね?」

「あ、そつか・・・・・その辺はどうなの?」

握つた手を開いた手のひらにぽん、と乗せて。

フェイトは首を動かして、アラストルに問いかける。

『我の場合、一時的に魔力を注いで自然治癒を促進させた、まあ、

『あの男』はそれすら必要としなかつたが・・・・・』

『どんだけ規格外や、その人』

『我からすれば、人の身で空を飛ぶお前らが規格外だ』

心臓を突き刺されても、アラストルの自然治癒促進を必要としなかつた男がいたこと。

それに対しはやては突つ込みを入れたが、アラストルに返されて、口をつぐんだ。

『何はともあれ、悪魔には非殺傷とやらでは太刀打ちできませんぞ、銃や刀のような、殺す武器でないと難しいだろ?』

『そうか・・・・・』協力、ありがとうございます!』

『構わん』

アラストルに礼を述べてから、はやは改めて考え始める。

あの塔 テメンニグルが、危険生物が跋扈している異世界へ通じる入り口なのだというのなら、この世界は文字通り地獄と化してしまうだろ？。

魔法を扱える自分達とその周囲ならともかく、70億以上の人間が危険に晒されてしまう。

いくら管理局でも対応できない。

ましてや、相手は自分達の魔法がいまひとつ効かない相手なのだ。万年入手不足の組織にとつては、大打撃以外の何者でもない。さらに、はやてが気になっていたのは、さきほど塔に突っ込んでいた二人組みの女性。

ジェットスキーに一人乗りし、妙にハイテンションで進軍していつた彼女らのことも気になる。

そして、もつと気になるのは、証言に出てきた『なのはが、心臓を刺してもピンピンしていた』ということ。もしそれが本当なら、なのはは普通の人間ではないということになる。

今のところ、自分達の中で一番テメンニグルについて知っている人間ということになるが・・・。

「あかんなあ・・・友だち疑うとか、いやな仕事やわ」

ままならないと言わんばかりに、はやはため息をつく。

- bingo ! !

blast ! !

『shoot ! !

h a - h a - ! !

嬉々とした表情で、大剣を振り回し、銃を乱発し、嵐のゴトク悪魔に飛び掛る。

接觸した悪魔は文字通り吹き飛ばされ、あるものは蟻の巣にあるのはスライスされ、血と一緒に赤い結晶をぶちまけた。

いた悪魔を壁ごと斬り捨ぐ。

い。
殺意と欲望の塊である悪魔も、ここまでされでは恐怖を感じるらし

同胞の屍の上に立ち、真っ白な肌と手足に返り血を浴ひたその姿は、狂氣や恐れを通り越して、威厳を感じさせた。

・・・・・ あははっ、I'm absolutely cr
azy about it! (楽しそうで狂っちゃいそうーーー)

無邪気に笑つて、銃口を向ける。

第五話はやて、考へる（後書き）

見返してみると、はやてが考察する部分があまり書けてない・・・
・・・。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2321v/>

魔剣士少女リリカルなのは

2011年11月21日18時52分発行